



Title	アメリカンスクール・イン・オキナワにおける衣生活領域の教材提案
Author(s)	松本, 由香; 崎山, 琴乃
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(91): 129-148
Issue Date	2017-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/37253
Rights	

アメラジアンスクール・イン・オキナワにおける 衣生活領域の教材提案

松本由香¹⁾・崎山琴乃²⁾

A Suggestion for the Material to Teach with the Area of Clothing at the AMERASIAN SCHOOL IN OKINAWA.

Yuka MATSUMOTO, Kotonon SAKIYAMA

I 緒言

1. 研究目的

沖縄では、アメリカ人を父親、日本人を母親とするいわゆるアメラジアンの子どもたちが、毎年およそ300人生まれているといわれ、そのほとんどが公立学校に通っている。しかしことばの問題、家庭の事情、地域の状況などの理由から、通学が困難な児童・生徒がいる。そうした子どもたちのために、1998年にアメラジアンの子どもをもつ母親が中心となって、アメラジアンスクール・イン・オキナワが設立された [NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ (2013) :1]。その翌年の1999年に、沖縄県教育委員会は「学校外の民間施設で相談・指導を受けている児童・生徒への対応について」という通達を出した。その通達には、公立学校で学んでいない、いわゆる不登校の児童・生徒の自立をうながし、学校生活に適應するために、学校が連携をはかり、相談・指導を行う関係機関として、いくつかの要件を満たす民間施設の設置が可能であることが記された [NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ (2013) :1]。そこでアメラジアンスクール・イン・オキナワは、ありのままの自分を肯定的に受け止められる力を育み、自尊心を高める日本語と英語による「ダブルの教育」を行うことを理念として、子どもたち

のニーズに適合したカリキュラムを編成してきている。しかし二言語で教えることによる時間の制約や教員不足のために、主要教科以外の副教科の授業時間数が少ないという状況がある [NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ (2013) :12]。その中で特に家庭科を取り上げてみると、家庭科室といった設備はなく、家庭科教諭がいないという現状があり、小学校「家庭」、中学校「技術・家庭」の授業時間数が、文部科学省の定める学習指導要領の授業時間数より少ないということに、本研究は着目した。その状況を改善するために、家庭科教育のうち、本研究は、日常生活に必要な縫う技術習得のため、衣生活領域の中の布を用いたペンケースやクッションといった生活小物製作を取り上げ、アメラジアンスクール・イン・オキナワ（以降、アメラジアンスクールと表記する）に合わせた教材を開発し、出前授業を行い、教育不足の問題を改善する。そうしてアメラジアンスクールの教育の充実に貢献しようとするものである。

まず本研究では、裁縫や手芸に関する興味・嗜好・経験の有無を把握するために、アメラジアンスクールに通う生徒を対象に、2016年5月にアンケート調査を行った。その調査をもとに、アメラジアンスクールに通う生徒の興味・嗜好や実態に沿って、少ない授業時間で充実した学習内容を提

¹⁾ 琉球大学教育学部

²⁾ 2016年度教育学部生活科学教育専修卒業生

案することを目指す。そして主に裁縫の基本的な技術を身につけられる授業内容の検討・提案を行う。さらにそれらをもとに授業実践を行い、布を用いた生活小物の製作によって、子どもたちが日常生活を営むための基礎的な裁縫技術を身につけ、生活小物製作が、生徒個人の自立をうながして生活を豊かにする力をもつことについて考察する。

2. 研究方法

本研究は次に示す方法で行う。

① 学校教育に関する文献及び資料収集

小学校「家庭」、中学校「技術・家庭」教科書における衣生活領域教材の取扱について調べる。アメリカンスクールでの成り立ちや報告書などの文献及び資料収集を行う。

② アメリカンスクールに通う中学生を対象にした手芸及び生活小物製作についてのアンケート調査

授業の前に生徒の実態を把握するために、裁縫のイメージや物づくりへの関心、家での手伝いの経験などについてのアンケート調査を、2016年5月に実施した。また授業後の意識の変化を知るために、裁縫のイメージ、物づくりへの関心、授業の感想について聞くアンケート調査を、2016年7月に実施した。授業前と授業後のアンケートを比較して、授業を受けての生徒の意識の変化を考察する。

③ 授業実践及び授業検証

文献資料とアンケート調査結果をもとに、アメリカンスクールにおける衣生活領域の教材提案をする。生徒の興味や嗜好に合わせることで、衣生活領域への関心を引き出せるような教材提案を行う。授業検討・準備の後、2016年5月13日～7月1日に、110分の授業実践を4回行った。

なお本研究は琉球大学「ちゅら島の未来を創る知の津染」事業における研究助成、2015年度前学期、2016年度前学期の地域志向教育推進プロジェクト「アメリカンスクールでの『家庭科』衣生活領域の出前授業を通した子ども・地域・国際理解の推進

事業」(研究代表者：松本由香)を受けて行った。

④ アメリカンスクールでの学童保育ボランティア活動での参与観察

2016年4月から2017年2月にかけて、筆者(崎山)が、放課後の児童・生徒の宿題の指導や遊び、活動に参加して観察を行い、アメリカンスクールの子どもや教育の理解を深めた。

II 家庭科衣生活領域教材と布を用いた物の製作意義について

1. 小学校・中学校の家庭科教科書における布を用いた物の製作の記述とその内容の検討

まず、小学校「家庭科」と中学校「技術・家庭科」家庭分野の教科書に、どのような布を用いた物の製作が記載されているのかを調べた。

小学校「家庭科」の教科書に取り上げられている物は、次のとおりである。

- ・開隆堂(2012)：ネームプレート、ティッシュボックスカバー、ランチョンマット、クッション、エプロン
- ・東京書籍(2004)：ランチョンマット、クッションカバー、エプロン、ナップサック、トートバッグ、フリース上衣のリフォーム

中学校「技術・家庭科」家庭分野では、次のとおりである。

- ・東京書籍(2016)：ティッシュボックスカバー、ランチョンマット、トートバッグ、ブックカバー、ウォールポケット、防災リュック、箸袋、弁当袋、ポーチ、ハーフパンツ
- ・開隆堂(2016)：ショルダーバッグ、ブックカバー、防災リュック、ペットボトルホルダー、布絵本、ハーフパンツ
- ・教育図書(2016)：ぞうきん、アームカバー、きんちゃく袋、ペンケー

ス、エプロン

これらの布を用いた物の製作は、生活に役立つ物と、身に着ける衣服の製作の二種類に分けてとらえることができる。特に小学校家庭科での生活に役立つ物について考察した松本（2013）を参考にすると、松本（2013）は、櫻井他（2010）の小学校家庭科教科書、櫻井（1992）の小学校学習指導細則、鳴海（2008）の小学校家庭科の作品集での布を用いた物の製作の内容について検討した。これらの文献から、松本（2013）は、生活に役立つ物の製作として、①インテリアあるいは住まいや家庭の仕事で使う、布でできた物の製作（クッション、クッションカバー、枕カバー、ペットボトルカバー、ティッシュペーパー入れ、ティッシュボックスカバー、ランチョンマット、花瓶敷き、弁当包み、ウォールポケット、壁掛け、のれん、エプロン、なべつかみ、ふきん、針刺し）、②身近な物を入れて運ぶ布でできた物の製作（マイバッグ、ナップザック、トートバッグ、ペンケース、手提げ袋、裁縫箱入れ袋、体操着の袋、フェルトを使ったネームプレート）、③遊びに使う物の製作（お手玉）、をあげ、これらが教材に適していることについて考察している〔松本（2013）:60〕。そして戦前から戦後および現在までの初等教育における学習指導要領を検討した田中（2011）を引用し、1930年代末から現在まで扱われた生活小物製作に、「裁縫および手芸は構成・配色・裁断・縫製等、物品製作の基礎技術としての側面に加え、生活を豊かにするための活用技術ないし問題解決の手段としての側面が重視されてきた」〔田中（2011）:116〕とする。つまり小学校家庭科教科書に取り上げられた生活小物の種類には、さほど経年による変化はないと結論づけた〔松本（2013）:56〕。

本研究は、小学校・中学校での家庭科における衣生活領域での布を用いた生活小物製作教育を対象としている。その中で小学校・中学校での製作する生活小物の種類をみると、学年別や学校種別での難易度の差はさほどないと考えられるので、上にあげた生活小物の種類の中から、アメリジアンスクールでの教材を選ぶことにする。

2. 布を用いた物の製作の意義

現代の衣生活においては、安価で質の良い衣服

や生活小物が容易に手に入るようになり、家庭で衣服はつくられなくなり、衣服や生活小物を購入し廃棄するという消費の流れが一般的である。しかし衣服や生活小物製作を経験することで、物づくりに多くの時間と技術が費やされていることを認識し、身の周りの物の価値を改めて見直すことができるであろう。物の製作を体験することで、物の構造がわかり、物を購入する際には、素材や縫製などに関心をもって検討することができるようになるであろう。自分の手でつくることによって、物の材料の形が変化していくことを実感し、完成時の達成感や自己肯定感を高めることができるのではないだろうか。布を用いた生活小物や衣服製作が、将来の進路選択の手がかりになることもあるだろう。また衣服や生活小物を補修する技術を身につけることによって、使い捨ての消費から脱し、物を長く使うことで、家計支出を抑えることができるのではないかと考えられる。

布を用いた物の製作の意義について、先に参考にした松本（2013）は、①布と生活との関わりを考える機会、②裁縫の技能・完成による達成感、③家族とのコミュニケーション、が得られることをあげている。それでは、その他にどのような先行研究があるのだろうか。本研究では、さらに次の3つを取り上げて、製作の意義について改めて考えてみることにした。

まず多々納・竹吉（2006）による「家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義」があげられる。この論文では、実際に製作活動を指導した家庭科教員が、製作活動の意義を「生活技能の習得」と「ものづくりとしての達成感・満足感」という二点にあると考えていることを明らかにした〔多々納・竹吉（2006）:22〕。

また福岡市教育センター・家庭・技術・家庭科研究室（2009）による「自ら製作する喜びを味わう家庭科学習指導法の研究」は、布を使った物を製作する児童が、製作の喜びを味わうことで、生活の技能の一つを身につけ、生活課題を解決し、家庭・家族への思いを深めることにつながっていくことについて述べている〔福岡市教育センター・家庭・技術・家庭科研究室（2009）:3〕。そして製作の学習で、「裁縫は好きですか」というアンケート調査を行ったところ、学習前には、「好き・

どちらかといえば好き」が68%、「どちらかといえば嫌い・嫌い」が32%であったが、学習後には「好き・どちらかといえば好き」が94%、「どちらかといえば嫌い・嫌い」が6%に逆転した例をあげている〔福岡市教育センター・家庭・技術・家庭科研究室（2009）：3〕。つまり布を使った物の製作を行うことで、児童が裁縫を好きになり、苦手意識が薄らいだことが示されているのである。

さらに小林（2004）は、中学校での被服製作実習の意義について検討している。学習指導要領の変遷において、被服教育、とりわけ被服製作実習の扱いは大きく変化し、授業時間は減少している。しかし被服製作という物づくりによって、技術の向上のみならず、努力によって作品が仕上がるといった成就感や達成感を味わうことができること、物づくりで培われた力は、既製品の選び方にも、色柄・デザインで選びがちであった視点に、縫製の丁寧さ、使途に合った素材であるかどうかの視点ももつことをうながすとしている。さらにリフォームする思考が養われ、物や資源を大切にする姿勢が養われるとしている〔小林（2004）：168〕。

以上の4つの論文から、布を用いた物の製作について、①布を縫うという生活技術の習得、②物づくりの達成感、③家族を思いやる気持ち、④物を大切に生活環境へ配慮する意識、を育む意義をもつ教材として適しているにとらえられる。これらの意義を生徒たちに体得してもらい授業実践のしかたを、アメリジアンスクールでの出前授業に合わせて、次章から考えていく。

III アメリジアンスクール・イン・オキナワの現状と課題

1. アメリジアンスクール・イン・オキナワの成り立ち

アメリジアンスクール・イン・オキナワの創立前は、アメリジアンの子どもたちは、主に沖縄クリスチャンスクール（OCSI）に通っていた。1996年9月、OCSIは校舎の老朽化に伴い、浦添市港川から読谷村へ移転した。しかし移転先が産業廃棄物処理場跡地であったことから、移転当初より、地盤沈下による新校舎壁の亀裂、校舎周辺岩盤からの蒸気発生、校舎内床の地熱の高温化、児童の

体調不良という異常事態が続いていた。1997年4月、健康被害を懸念した子どもたち約80名の保護者らは、子どもをOCSIから自主退学させ、公立学校や無許可のフリースクールやホームスクーリング（在宅学習）で学ばせることにした〔與那嶺（2009）：12〕。フリースクールに転校した児童生徒の保護者らは「国際児のための教育研究会」を発足させ、この組織を母体として、公的支援要請を沖縄県に働きかけようとした。しかし方向性の違いなどが生じ、同会は解散した。後にフリースクールに通わせていたアメリジアンの子どもの母親が中心となり、1997年11月に「アメリジアンの教育権を考える会」が結成され、学齢期のアメリジアンの就学実態調査、公立インターナショナルスクールの設立、公的財団支援などの教育権保障を沖縄県に申請した〔與那嶺（2009）：12〕。

アメリジアンの子どもたちにとって、ことばの学びが、ありのままの自分の状態でよいという自信をもつ大きな力となることを、母親たちは確信し、英語で学ぶ環境を求めて、公立学校における国際児クラスの設置を訴えたが、行政側は「日本の義務教育では保障されない」とし、当初は公的支援を認めなかった〔與那嶺（2009）：12〕。

しかし日々成長する子どもたちを目の前にして、行政の対応を待ってはられないと、1998年6月、母親たちはアメリジアンスクールを開校した。建物の一室を月額3万円で借用し、無認可のフリースクールとして、教師1名、生徒13名でスタートしたのである。そしてその2ヵ月後、母親たちは共同出資して、アメリジアンスクールを宜野湾市大山へ移転させた〔與那嶺（2009）：12〕。

生徒たちの中には、以前通っていたインターナショナルスクールへの在学を理由に、「就学免除・義務教育免除」にしたがって、公立学校における学籍を抹消されていたケースもあった。どちらにしても無認可のままでは小・中学卒業認定ができないため、アメリジアンの母親たちによって結成された「アメリジアンの教育権を考える会」は、1999年1月、宜野湾市教育委員会へ「就学義務免除及び学籍回復についての申し入れ」を提出した。その結果、児童・生徒の学籍は、学校区内にある公立学校へ編入学するという形で回復された〔與那嶺（2009）：12〕。

しかし、学籍が回復したアメラジアンスクールの児童・生徒も、在籍校で書類上は「不登校」とみなされていたのである。そこで宜野湾市教育委員会は、1999年8月、宜野湾市内小・中学校長宛に「出席扱い」に関する指針を出し、児童・生徒はアメラジアンスクールに通うことで「出席扱い」となり、学籍のある公立学校での進級が認められ、さらに卒業証書が与えられるようになった。また他の市町村教育委員会も同様の措置をとるようになり、事実上民間の教育施設として認められる形になったのである [與那嶺 (2009) :12]。

さらに「アメラジアン教育権を考える会」は、沖縄県議会にアメラジアンスクール卒業の子ども義務教育資格認定や公的援助などを要請し、1999年3月には、当時の文部大臣に「国際児の実質的保障」を要請し、アメラジアンスクールの存在は国会議員からも注目されるようになった [與那嶺 (2009) :13]。そして2000年3月、公的支援が参議院予算委員会で取り上げられた。後に宜野湾市と政府の沖縄問題担当高官との話し合いで、アメラジアン問題は「基地あるがゆえの社会問題」であるとの認識で一致し、アメラジアンへの公的支援については宜野湾市が窓口となり、米軍基地所在市町村活性化事業（島田懇談会事業）を活用し、アメラジアンスクールへ施設を提供することが決定した。そして、2003年4月、宜野湾市志真志に「宜野湾市人材育成交流センター・めぶき」が完成し、その1階部分がアメラジアンスクールの新校舎となり、現在に至っている [與那嶺 (2009) :13]。

2. アメラジアンスクール・イン・オキナワでの家庭科教育の現状

アメラジアンスクールでのクラス編成は、教室

が7つしかないことから複式学級にせざるを得ず、生徒の人数によって、毎年学年の組み合わせは変わる。現在、AからGまでの7クラスで、Aクラスは幼稚園児、Bクラスは小学校1年生、Cクラスは小学校2年生、Dクラスは小学校3・4年生の複式学級、Eクラスは小学校5年生、Fクラスは小学校6年生と中学校1年生の複式学級、Gクラスは中学校2・3年生の複式学級である。教育予算のつかない民間施設であるため、アメラジアンスクールは、保護者から徴収する授業料と寄附および沖縄県からの補助金で人件費を賄い、必要とされている日本語教員や専門科目の教員を科目ごとに雇用することが難しい。そのため、アメラジアンスクールでの家庭科教育の授業時間数は表1に示すとおりであり、文部省の定める授業時間数よりかなり少ない。アメラジアンスクールの小学生は、公立の小学校にはない「健康科Health」という教科を履修する。この教科では、中学校「技術・家庭」の中の栄養、食品を取扱い、主食や副菜を検討して献立を考える宿題が出されて、生徒たちは自主学習をしている。そして放課後のスクールでの学童保育に加入している児童は、ゼリーや白玉団子などの自らのおやつづくりをして、食生活領域を学んでいる。

アメラジアンスクールでは、英語と日本語のジョイント授業や、各教科を横断するプロジェクト型の授業など、文部科学省の学習指導要領に当てはまらない独自のカリキュラムも存在する。児童・生徒の学習や成長のために、アメラジアンスクールは公的支援の充実を求める取組を継続しつつ、より良いカリキュラム編成を模索している [NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ (2013) :12]。

表1 アメラジアンスクールでの授業時間数

	小学校「家庭」		中学校「技術・家庭」		
	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
アメラジアンスクールの授業時間数 (時間)	5	5	10	7	7
文部省の定める授業時間数 (時間)	60	60	70	68	35

[NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ (2013) :12]



写真1 宜野湾市のアメリカンスクール・イン・オキナワ

IV アメリジアンスクール・イン・オキナワでの授業計画と授業実践

1. 授業前アンケート調査の結果について

授業前に、「物を作ることへの興味」と「裁縫のイメージ」などについて尋ねるアンケート調査を行い、18人が回答した(表2参照)。

その結果、授業前に物をつくることに興味があると答えた生徒は16人いて、物づくりへの興味は高いといえる。どういった物をつくりたいかという問いには、人形や洋服、ポーチ、ペンケース、また食べ物(調理)も含まれ、物づくりへの興味は多様な物にみられるといえる。家庭での手伝いはほとんどすべての生徒がしていて、食事の後片

表2 授業前アンケート調査結果

学年	物をつくることへの興味	どういった物をつくりたいか	家庭での手伝いの有無	手伝いの内容	アイロンの経験の有無	裁縫の経験の有無	縫ったことがあるもの	裁縫に対するイメージ
1	いいえ	わからない	はい	洗濯、食器洗い、料理	はい	はい	かばん、ブックカバー、エプロン	人形、針が指に刺さって痛い
1	はい	枕カバー、人形、かばん、ポーチ	はい	食器洗い、洗濯、掃除機	はい	はい	エプロン、かばん、ボタン縫いつけ	難しそうだけどやってみたくて楽しそう。はまりそう
1	はい	人形、枕、ペンケース	はい	掃除、洗濯、食器洗い	いいえ	はい	エプロン、洋服	ちょっと難しそう
1	はい	動物の人形、ブックカバー	はい	食台ふき	いいえ	はい	ブックカバー、エプロン、バッグ、動物のぬいぐるみ	未記入
1	はい	ロゴが入ったシャツ	はい	洗濯物をたたむ、掃除機をかけた後掃除をする。	いいえ	はい	タオルや洋服を裂いた	何も感じない
1	はい	動物の人形、鉛筆、しおり、かつら、ジュエリー	はい	ぞうきんがけ、料理	はい	はい	かばん、エプロン、ブックカバー	芸術的につくろうとするけれど、だいたい失敗してしまう。たまに上手くいく
2	はい	特に何もつくりたくない	はい	食器洗い、洗濯、洗濯物をたたむ	はい	はい	巾着ぶくろかばん	難そう
2	はい	ビーズ、靴下、タオル、ハンカチ	はい	朝食づくり、食器洗い、洗濯	はい	はい	バッグ、ビーズ	難しい時間はかかるが価値はある
2	はい	何でも	はい	洗濯	いいえ	はい	エプロン、ブックカバー、ネームプレート、かばん、ブックカバー、エプロン、ネームプレート	未記入
2	はい	洋服	はい	食器洗い、床拭き、洗濯物をたたむ	はい	はい	エプロン、ネームプレート	私は縫物をするとても難だから、とても挑戦的だけど楽しい
2	はい	洋服、シュシュ、クッション、ぬいぐるみ	はい	食器洗い、洗濯物を取り込む	はい	はい	エプロン、ぬいぐるみ	楽しいけど、痛いイメージがある。自分はまだあまり器用ではないので、しよっちゅう針をさしてしまいます。でもつくるのは楽しいです
2	はい	小物	はい	洗濯、料理、食器洗い	はい	はい	バッグ、エプロン、ランチョンマット	大人になっても役立つこと。楽しい
3	はい	食べ物、DIY	はい	掃除、洗濯、料理	はい	はい	エプロン、バッグ、ブックカバー	何をつくるかによって、縫い方が変わる
3	はい	食べ物	はい	掃除、洗濯	はい	はい	エプロン、ブックカバー、ネームプレート	あまり好きじゃない。疲れる
3	いいえ	食べ物、帽子	はい	家の片付け	はい	はい	エプロン、ブックカバー	難しいと疲れてしまう
3	はい	DIY	はい	食器洗い、洗濯	はい	はい	エプロン、かばん、ブックカバー、ネームプレート	おばあちゃん
不明	はい	畑種	はい	食事のしたく	いいえ	はい	かばん	気分転換
不明	はい	ヘルメット	いいえ	なし	いいえ	はい	かばん	なんだか奇妙な感じがする

付けや洗濯物の取り入れ、保管など、家庭の仕事の理解はあるといえる。その中で裁縫について聞いたところ、その経験はすべての生徒があると答え、これは、昨年度の本授業実践によるものと考えられる。縫ったことのある物について尋ねたところ、昨年度、授業で扱った、ネームプレート、ブックカバー、エプロン、バッグのほか、ぬいぐるみ、ランチョンマットなどが、つくったことがある物としてあげられた。

このアンケート調査結果から、今年度は、まず最初に玉結びや玉どめの復習として、ネームプレートづくりを教材に取り上げることとする。そして次にペンケースづくりを取り上げ、三つ目に、ぬいぐるみにも応用できるクッションづくりを取り上げることとする。そして製作の日程を、2016年5月13日から2016年7月1日にかけて、1回110分の授業として、4回実施することにした。そこで指導計画を全8時間として設定した。

2. アメリジアンスクールでの授業実践

昨年度の本授業では、布地の裁断、印つけから始め、多くの時間が必要となり、縫製にゆっくり時間がとれなかったことから、今年度は布地を必要な大きさにあらかじめ裁断し、印つけもした布を配布することにした。

4回の授業の学習指導案は、次のとおりである。

技術・家庭科（家庭分野）学習指導案

実施日時：2016年5月13・27日・6月3日・

7月1日（金）13:10～15:00

学校名：アメリジアンスクール・イン・オキナワ

場所：宜野湾市男女共同参画支援センター「めぶき」

学級：中学校1～3年生（男子8人・女子11人、計19人）

授業者：崎山琴乃

指導教員：松本由香

I. 題材名「布でつくってみよう」

II. 題材設定の理由

1. 題材観

今は安価に衣服を購入することができる時代となった。昔と比べて衣服を補修する

ことは少なく、使い捨てて消費する傾向が高くなってきた。しかし、ファスナーつけや基本的な縫い方についての知識があるだけで、気に入って着ていた衣服を補修でき、その結果、生活費を抑えることができ、資源の有効活用につながるであろう。

本題材は、小学校学習指導要領の内容「C 快適な衣服と住まい、(1) 衣服の着用と手入れ、イ日常着の手入れが必要であることが分かり、ボタンつけや洗濯ができること」、中学校学習指導要領の内容「C 衣生活・住生活と自立 (1) 衣服の選択と手入れ、ウ衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れができること」と関連させて進めていく。

2. 生徒観

2015年度から、アメリジアンスクールでの布を用いた物の製作に関する授業を、生活科学教育専修4年次学生によって始め、2015年度の授業では、針を使うことが初めてという生徒が過半数いた。2015年度、生徒たちは、ネームプレートやナップザック、エプロンの製作をとおして、印つけやなみ縫い、返し縫いといった基本的な縫い方について学んできた。針を持つと指が痛い、縫っていると糸が絡まるなど、布を用いた物の製作に対して苦手意識をもつ生徒がいる。しかし2016年度に行ったアンケート調査で、つくりたい物として人形やポーチなど、数種類をあげていて、布を用いた生活小物の創作意欲はあるといえる。

3. 指導観

授業の初めに、見やすいように文字や生地をかたどった大きめの掲示物を使って、一斉授業の授業形態で説明することで、クラス全体で基礎的な情報を共有する。その後、一斉授業で理解できなかった内容について、個別指導によって確認し、生徒の反応を見ながら手順を説明して、作業の手本を間近で見せることで、技術を感覚的に習得させたい。授業展開をスモールステップで進めていき、グループを組んで手順について話し合うことで、布を用いた生活小物

の製作に対する苦手意識を和らげたい。

Ⅲ. 題材の目標

- ・糸通し、玉どめ、玉結び、なみ縫い、など基本的な技術を身につける。
- ・製作に必要な用具を安全に使うことができる。

Ⅳ. 指導計画 (全体計画) 全8時間

第1回 ネームプレートをつくろう!

… (2時間)

第2回 ペンケースをつくろう! (その1)

… (2時間)

第3回 ペンケースをつくろう! (その2)

… (2時間)

第4回 クッションをつくろう! … (2時間)

第5回 アメラジアンスクール作品展

3. 授業準備・授業実践

第1回授業実践「ネームプレートをつくろう!」

5月13日(金) 13:10~15:00

2015年度の授業で生徒たちが学んだ裁縫技術を思い出してもらい、裁縫技術の復習のために、初回の教材をネームプレートにすることにした。これまでに使ったことのない様々な生地に触れてもらうためにも、生地縫い代始末の処理が不要なフェルトの生地を用いることにした。生徒が好きな形を選べるように、同じような難易度のネームプレートのキットを、写真2のように、船、サッカーボール、花、キャラクター、ペンギンの5パターンとして準備した。完成した状態や、糸を通す場所がわかるように、赤い線を針目として記入したプリントも準備した(写真3~8)。



写真2 ネームプレートの5つのパターン

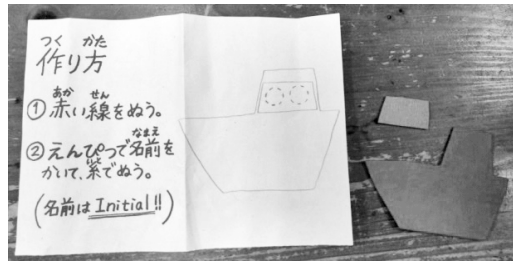


写真3 つくり方のプリント



写真4 キャラクターの縫い線①



写真5 キャラクターの縫い線②

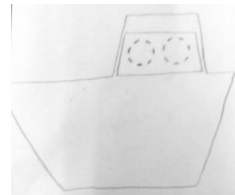


写真6 船の縫い線

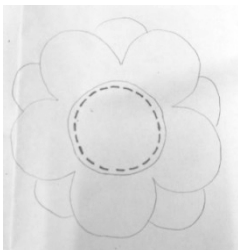


写真7 花の縫い線

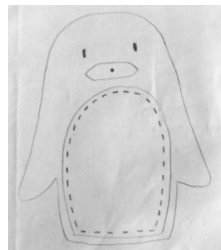


写真8 ペンギンの縫い線

授業展開の最初に、玉どめや、玉結び、なみ縫いの方法について、一斉に説明を行うことにした。後方の席の生徒も手順がわかるように、写真9や写真10のように、針やネームプレートの大きめの掲示物を作成した。

玉結び、玉どめ、なみ縫いを事前に練習するために、約10cm角の木綿布を生徒に配った。布を拡大した掲示物、ネームプレートの完成見本(写真11)も用意した。



写真9 針に見立てた教具

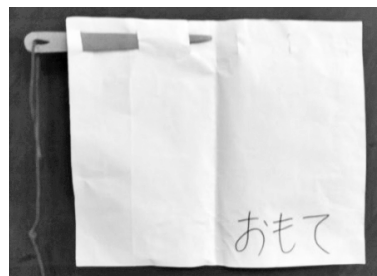


写真10 なみ縫いの教具



写真11 作成したネームプレートの完成見本

(1) 本時の学習

1) 題材名「ネームプレートをつくろう！」

2) 本時の目標

- ・糸通し、玉どめ、玉結び、なみ縫いなど基本的な技術を身につける。
- ・製作に必要な用具を安全に使うことができる。

3) 資料・準備物

- ・形に切ったフェルト、安全ピン、掲示物

準備する裁縫道具セット

- ・裁ちばさみ ・糸切りばさみ ・まち針
- ・ぬい針 ・ピンクッション
- ・ぬい糸各種 ・ものさし

4) 本時の展開

時間	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	授業形態
導入 20 分	<ul style="list-style-type: none"> ○授業前アンケートを記入する。 ○本時のめあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業前アンケートを配布する。 ○本時のめあてを提示する。 	一斉
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">めあて：ネームプレートをつくろう！</div>		

<p>展 開 80 分</p>	<p>○用具の使い方や注意点を確認する。 ○基本的な技術の練習をする。 ・練習用布で玉結びと、玉どめの練習をする。 ・なみ縫いの練習をする。 ○パーツや、フェルトの周りを縫う。 ○フェルトに名前のイニシャルをチャコペンでつける。 ○安全ピンをつける。</p>	<p>○用具の使い方や注意点の説明をする。 ○針となみ縫いの教具で説明する。 ○練習用布の配布 ○フェルトの説明をして配る。 ○チャコペンでつけた模様をなみ縫いで縫わせる。 ○安全ピンをセロテープで固定してから縫わせる。</p>	<p>一斉 一斉 個別 全体</p>
<p>総 括 10 分</p>	<p>○針をピンクッションに戻す。 道具を片づける。 ○部屋の清掃を行う。</p>	<p>○安全な状態か確認する。 ・次回の内容を知らせる。</p>	<p>一斉</p>

5) 授業のようす

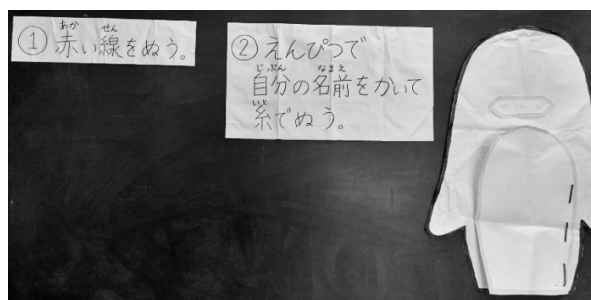


写真12 説明の教具の掲示



写真13 玉どめ・玉結びの練習

(2) 第1回授業後の成果・反省

1) 生徒のようす

最初にネームプレートを作成したが、初めて手芸を行う生徒や、丁寧に作業を進める生徒もいて、作業の進度に個人差があった。また本時の目標である玉どめ・玉結びの習得については、一斉授業で説明をして個別授業で回ったところ、作業が難しそうなようすであった。

2) 授業者の感想

本時は最初の授業で、筆者（崎山）はスクールの中学生に会うのは初めてであった。日本語がわかる生徒がほとんどで、わかりにくい日本語については、生徒同士で次の手順を

英語で伝え合ってくれたので授業を進めることができた。しかし教師の教える手立てとして、ゆっくり話すなどの配慮が必要だとわかった。ネームプレートを完成することができた生徒がほとんどだったが、安全ピンを取りつけられていないなど、完成できずにいる生徒が数名いたので、次回の導入で完成させられるように、授業展開を検討しようと思った。

第2回授業実践「ペンケースをつくろう! (その1)」

5月27日（金）13:10～15:00

ファスナーつけやなみ縫いに慣れるために、ペンケースを教材とすることにした。表布や裏布の質感の違いが分かるような、厚みに違いが

あり、裁ち目に始末処理の必要な生地を選んだ。表布と裏布は10cm×20cmを各2枚とし、縫い代の印をつけ、さらにファスナーと飾りレースを加えたペンケースのキットを、筆者らが作成した。表布と裏布を4種類ずつ用意し、ファスナーも色違いのものを選べるようにして、生徒一人一人の作品のデザインが異なるように、色とりどりのペンケースのキットを準備した（写真

14～16）。また今回のペンケースでは、裏布に開き口を作るので、開き口となる8cmの寸法がわかりやすいように、厚紙で8cmの定規を作成した。

今回も展開の初めに、ペンケースの手順について説明するため、ペンケースの部分を大きく示した掲示物を作成した（写真17～19）。



写真14 ペンケースのキット



写真15 ペンケースの種類

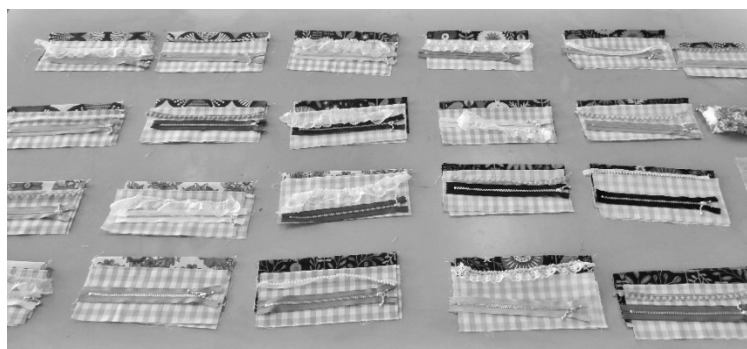


写真16 準備したさまざまな種類のペンケースのキット

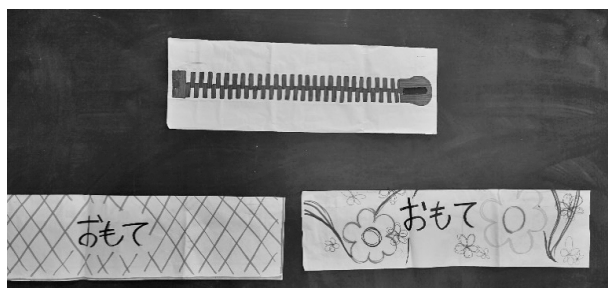


写真17 準備したペンケースの掲示物

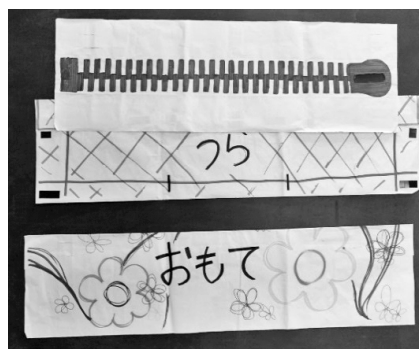


写真18 ファスナーに裏布を合わせる



写真19 ファスナーに表布を重ねる

ペンケースのつくり方を次に示しておく (図2)。

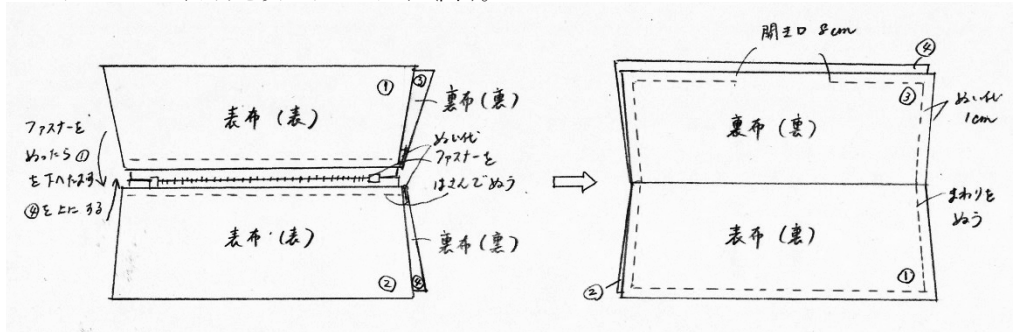


図1 ペンケースのつくり方

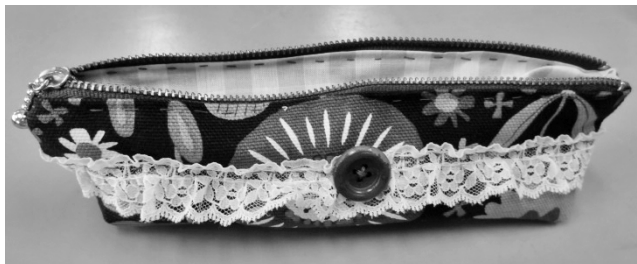


写真20 製作したペンケースの見本

(1) 本時の学習

1) 題材名「ペンケースをつくろう! (その1)」

2) 本時の目標

- ・糸通し、玉どめ、玉結び、なみ縫い、など基本的な技術を身につける。
- ・製作に必要な用具を安全に使うことがで

きる。

3) 資料・準備物

- ・布、ファスナー、レース、掲示物

準備する裁縫道具セット

- ・裁ちばさみ
- ・糸切りばさみ
- ・まち針
- ・ぬい針
- ・ピンクッション
- ・ぬい糸各種
- ・ものさし

4) 本時の展開

時間	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	授業形態
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○前に出て前時のネームプレートを発表する。 ・つくってみて感じたことや、できばえはどうか発表する。 ○本時のめあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○グループで発表者1名を前に選出させる。 ○本時のめあてを提示する。 	一斉
	めあて：ペンケースをつくろう！（その1）		
展開 90分	<ul style="list-style-type: none"> ○今日の作業の流れを確認する。 ○布にレースをなみ縫いで縫い合わせる。 ○ファスナーに布をなみ縫いで縫い合わせる。 ○布の周りを縫う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○布の合わせ方や、縫い代について掲示物を使って説明する。 ○前時までのなみ縫いが定着しているか確認する。 ○手順や縫い方がわかるか机間指導する。 ・ファスナーが開けられるように縫っているか確認する。 ○掲示物で、縫い代や開け口について再度確認する。 	<p>一斉</p> <p>個別</p> <p>全体</p>
総括 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○針をピンクッションに戻す。 ○道具を片づける。 ○掃除をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○安全な状態か確認する。 ・次回の内容を知らせる。 	一斉

5) 授業のようす



写真21 ペンケース製作

(2) 第2回授業後の成果・反省

1) 生徒のようす

女子はレースをつけたがるケースが多く、レースを縫ってなみ縫いの練習をすることができた。各人で形や色の違うレースを好きな

形にして縫っていたので、それぞれ印象の違った作品になった。裏布を友人と交換し、布の色の違いを楽しんでいた。男子はレースを縫いつけるケースはほとんどなく、先にファスナーを縫いつけ始めて次の手順へと進ん

だ。女子よりも先に進んだが、ファスナーと布の間隔を狭く縫ってしまい、ファスナーが開けられず縫い直す男子生徒が多くいて、男子と女子で進度には差はなかった。

2) 授業者の感想

全員で統一して同じ進度で作業ができるように、用意していたボタンつけを取り入れてもよいと思った。またファスナーを布で挟んで縫うことが難しそうだったので、縫う前にグループで待ち針の打ち方を確認するとよいことがわかった。ペンケースをつくる途中で作業時間が終わり、次回の授業では、本授業で実習したことの振り返りをしっかり行いたいと思った。

第3回授業実践「ペンケースをつくろう! (その2)」

6月3日(金) 13:10~15:00

前時で完成することができなかったペンケースの製作を引き続き行わせる。前時はファスナーを取りつける工程で終わってしまった生徒が

多いので、本時は布の周りを縫うことを確認して、各自製作にとりかかる。縫い終わるのが早い生徒がいれば、終了していない生徒の補助や、縫い残しがあるネームプレートをつくったり、次回のクッション製作で行う布の裁断を前もって行う。

(1) 本時の学習

1) 題材名「ペンケースをつくろう! (その2)」

2) 本時の目標

- ・糸通し、玉どめ、玉結び、なみ縫い、など基本的な技術を身につける。
- ・製作に必要な用具を安全に使うことができる。

3) 資料・準備物

- ・布、ファスナー、レース、掲示物

準備する裁縫道具セット

- ・裁ちばさみ ・糸切りばさみ
- ・まち針 ・ぬい針 ・ピンククッション
- ・ぬい糸各種 ・ものさし

4) 本時の展開

時間	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	授業形態
導入 10分	○前時の振り返りをする。 ○本時のめあてを確認する。 めあて：ペンケースをつくろう! (その2)	○どこまで進めることが出来たのか共有する。 ○本時のめあてを提示する。	一斉
展開 90分	○今日の作業の流れを確認する。 ○開き口を残して、布の周りを縫う。 ○布を表返して開き口を縫って閉じる。 ・グループの手助けをする。	○全体の進捗を確認する。 ○縫い目を細かくするように指導する。 ○ペンケースの形になっているか最終確認をする。 ・完成したグループには次週の予習をさせる。	一斉 一斉 個別
総括 10分	○針をピンククッションに戻す。 ○掃除や後片づけをする。	○安全な状態か確認する。 ・次回の内容を知らせる。	一斉

(2) 第3回授業後の成果・反省

1) 生徒のようす

男子の中には、母親へのプレゼント用として「MOM」とレースで縫いつけた生徒もいて、彼は、プレゼントするのを楽しみだと答えてくれた。生徒たちは、手順に従ってファスナーと布を合わせて布の周りを縫ったが、ペンケースのどの部分を縫っているのかわかりにくそうであった。開き口から布を表返すとペンケースの形となり、そのつくり方に驚いたりしながら、今までの工程を納得していた。

2) 授業者の感想

生徒たちは、ペンケースができあがった時には、ファスナーを表布と裏布で挟んで縫ってから、表布どうし、裏布どうしを合わせて縫って、開き口から裏返すというつくり方に驚き、またつくることのおもしろさを感じる

ことができた。しかし工程が長く、完成するまでに飽きてしまう生徒がいたので、裏布を使わず表布だけでつくれるように工夫するなど、工程の簡略化を検討してもよいと思った。進度にばらつきが出て、次回の内容であるクッションに進んだ生徒もいるが、まだ布を表返す工程に到達していない生徒もいたので、次回で同じ進度になるように調整したい。

第4回授業実践「クッションをつくろう！」

7月1日(金) 13:10～15:00

事前アンケートで希望の多かったクッションを教材とした。25cm角の薄手の布を2枚セットで用意した。それぞれ違ったクッションができるように、8種類の柄の布と、星形、丸形、ハート型の型紙を用意し、それに加えて四角の4種類の形から選べるようにした(写真22～25)。

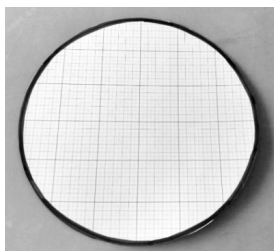


写真22 丸形の型紙

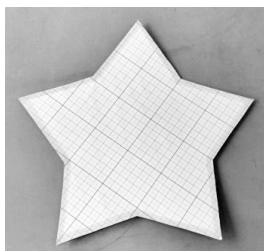


写真23 星の型紙

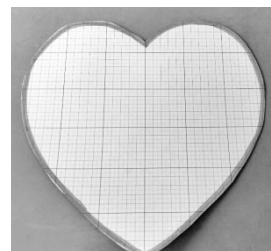


写真24 ハート型の型紙

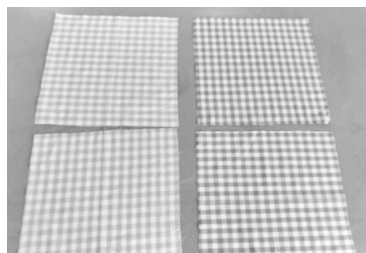


写真25 クッションの布



写真26 製作したクッションの見本

(1) 本時の学習

1) 題材名「クッションをつくろう！」

2) 本時の目標

- ・糸通し、玉どめ、玉結び、なみ縫い、など基本的な技術を身につける。
- ・製作に必要な用具を安全に使うことができる。
- ・日常の生活で使うものをつくる。

3) 資料・準備物

布 (25cm × 25cm:2枚)

準備する裁縫道具セット

- ・裁ちばさみ ・糸切りばさみ ・まち針
- ・ぬい針 ・ピンクッション
- ・ぬい糸各種 ・ものさし

4) 本時の展開

時間	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	授業形態
導入 10分	○本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">めあて：クッションをつくろう！</div>	○本時のめあてを提示する。	一斉
展開 80分	○布を裁断する。 ・できあがりイメージして印つけさせる。 ○開き口を8cm残して、布の周りをなみ縫いする。 ○布を表返して、パンヤを詰める。 ○開け口をまつり縫いで閉じる。	○前回で布の裁断まで終わった人数を知り、進捗を確認する。 ○前で手順を説明する。 ○細かく縫うように指導する。 ○適切なパンヤの量を判断させる。 ○まつり縫いの縫い目が目立つので、ていねいに細かく縫うのを意識させる。	一斉 グループ 一斉 個別
総括 20分	○本時の感想を話し合う。 ○授業後アンケートを記入する。 ○裁縫道具をしまい、掃除をする。	○数名に作品の発表をさせる。 ○授業後アンケートを配布する。 ○最終点検を行う。	一斉

5) 授業のようす



写真27 クッション製作の説明



写真28 クッションにパンヤを詰める

(2) 第4回授業後の成果・反省

1) 生徒のようす

ネームプレートで習得した玉どめ・玉結びの技術と、ペンケースで習得した開き口を縫い残す工程が、クッションを製作するために必要である。今までの復習の意味もあって、前回までよりも容易に製作を行っているようであった。中表にして二枚の布をピンで合わせ、開き口を残してなみ縫いしてから表返し、開き口からパンヤを詰める作業が、生徒たちにとって今までにない経験だったようで、詰めても詰めてもまだ入っていくパンヤの収縮性に驚きながらも、どれくらいパンヤを詰めれば理想の柔らかさのクッションになるのか試しながら詰めていた。

2) 授業者の感想

本時が最後の授業なので、全員が作品を完成できるように、時間調整のしやすいクッションの教材を選んだ。クッションの布の表に自由に刺繍をすることができるので、好きな模様を描きながら、なみ縫いや玉どめ・玉結

びの練習ができる。

第5回「アメリジアンスクール作品展」

7月12日(火)

製作した作品をスクールの生徒や先生たちが見られるように、アメリジアンスクールの玄関ホール横の事務室の前に展示した。提供した教材の布の色や柄を多様に工夫したため、一箇所に並べてみると、どれも異なっていて、生徒たちの作品の多様なオリジナリティが感じられた。展示作品の横にコメントボックスを設置し、作品展を見たスクールの誰もが作品についてコメントできるようにした。16名の生徒や先生、保護者の方々がコメントしてくれた。「とても上手にできている」、「販売できるのではないかな」などのコメントがあり、製作した生徒の製作の自信や達成感につながったと考えられる。また「私もつくりたい、つくってほしい」などのコメントもあり、低学年の児童らも、布を用いた物の製作への興味をもったのではないかと思う。



写真29 作品展

4. 授業後アンケート調査の結果と考察

授業実践を終えての感想について記入するアンケート調査を行った。アンケートには「物をつくることへの興味」と「裁縫のイメージ」など授業前に行ったアンケートと同様の質問を設けた。授業前と授業後での変化をアンケートによって読み取る。授業後は16人から回収することができた(表3)。

アンケートでは、授業前に物をつくることに興味があると答えた生徒は18人中16人で、物をつくることへの興味は授業前から高かった。授業後に

興味があると答えた生徒は16人中14人と、物をつくることへの興味をもった生徒数にほぼ変化はなく、多くの生徒が物をつくることに興味もっていた。どんな物をつくりたいかという質問に、パーカーやジャケット、スカーフ、洋服、人形など、さまざまな物をつくりたいとして、つくりたいアイテムが広がったといえる。また13名の生徒が、布を用いた製作の授業を受けてよかったと回答した。「教師と共に学べるのがよかった」、「去年より成長できた」と答えた生徒がいた。

表3 授業後アンケート調査結果

学年	裁縫に対するイメージ	物をつくることへの興味	どういった物をつくりたいか	感想
1	痛い、刺す	いいえ	プレスレット	よかった。楽しかった 自分でも物がつくれてうれしかった
1	きれいに作るのが難しいけど、楽しい	はい	枕やポーチ	ちゃんとした縫い方がわかって楽しかった これからも、家でいろいろ縫ってみたい
1	楽しかった	はい	かぼんと人形	いろいろなことをして楽しかった。ちょっと難しかったけど、先生たちが教えてくれたからよかつた この授業で沢山つくれると思っていたけれど、振り返ると3つしかつくれていない。実をいうと、私はこのクラスが好き。そして、去年よりも私は成長できたと思う
1	難しい。イライラするけど楽しい	はい	動物のぬいぐるみ、キーホルダー	未記入
1	良い	いいえ	わからない	もっと他のものもつくってみたいと思った 次の学年でも同じように楽しみたい
1	未記入	はい	動物のぬいぐるみ、小さいミニチュアの洋服	難しかった。自分が不器用なのが悪いと思うけど
2	楽しいけど、難しく、痛いというイメージがある	はい	ぬいぐるみとかかごとかつくりたい	クッション、ペンケースをつくつたのは初めてだったけど楽しかった。この授業でこのような物の作り方を習ってよかった
2	裁縫はとても基本的な生きる力だと思う。女性的だとよく考えられているけど、そうではないと思う	はい	これから人形の作り方やほかにもいろいろなものをつくっていききたい	とても楽しかった。縫い方はわかったが、枕やケースなど他のつくり方がわからない
2	何か活動をするための準備だと思う	はい	洋服や、スカーフなど沢山つくりたい	とても楽しかった。ペンケースが最初にできた時はとても驚いた。もっとこのようなものをつくっていい
3	ちょっと難しい	はい	マイクラフトで何かを作りたい	クッションをつくって、意外と難しかった
3	将来に役立つことだと思う	はい	学校で使えるもの	一番ペンケースが難しかった。色んなものをつくれて楽しかった
3	楽しい	はい	何を作っても楽しいから、なんでもつくりたい	最初はできなかったけれど、できるようになって楽しくなってきた
3	わからない	はい	木とかDIYがしたい	とても楽しかった
3	考えたことがない	はい	木とかアクセサリーがいい	縫い方や、やった事がないことをして楽しかった
3	便利	はい	音楽	みんなが集中できていたので良かった

2015年度に授業を行った生活科学教育専修の当時4年次の学生によれば、製作を途中であきらめ、最後まで完成できなかった生徒がいたが、2016年度は、生徒全員がすべての作品をつくり上げることができた。授業の初めは玉結び・玉どめがうまくできない生徒が多かったが、授業を重ねるごとに手際がよくなり、きれいに細かくなみ縫いができるようになっていった。平面的な布地から立体的な形に仕上げていく過程で、物がどのような部分から成り立つかの構成について学べたと考えられる。縫う前には、自分にはできないと思い込んでいたことが、積み重ねによってできるということが、生徒たちの達成感につながったと考えられる。また1人1人違った作品になったので、家族にプレゼントしたり、生徒自身が製作後に作品を楽しんで使うことが想像される。

V アメラジアンスクール・イン・オキナワにおける衣生活領域の教材提案

アメラジアンスクール・イン・オキナワでの授業実践で、受講した生徒たちのようすから、生徒

たちは、2年にわたる布を用いた生活小物の製作をとおして、前年より上手に縫えるようになったことや、最後まで頑張つて作品を完成させて作品展に出品した達成感を、それぞれに感じたと考えられる。

受講した生徒が、母の日のために、母親が好む柄を選んで作品をつくつたり、友達と柄の異なる布を互いに交換して、他の生徒とは違うデザインの作品になるように工夫したり、家族にプレゼントするため、あるいは自分で使うためには、どのように作品をつくるとよいか、生徒一人一人が工夫して考えて実習を行っていた。生徒がそれぞれの作品を家族にプレゼントすることで、それぞれの家族はプレゼントを喜び、生徒のアメラジアンスクールでの学びの努力や日々の成長を感じたであろう。

また今回の授業で、「もう一度同じ物をつくりたい」、また「次はこういう物がつくれそう」というように、今後つくりたい物への興味をもつことができた。生徒が習得した基本的な裁縫技術で、衣服を補修したり、新たな物をつくつたりすることができるであろう。さらに生徒が物づくりに興味

をもち、生徒たちの生活がより豊かになっていくことが推察される。

本研究におけるアメラジアンスクールでの布を用いた生活小物製作の授業実践の意義について、2016年8月に公示された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会による「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」に照らし合わせて考えてみたい。中央教育審議会のまとめによれば、家庭科、技術・家庭科家庭分野の教育目標のあり方について、「家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係わる技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見出して課題を設定しそれを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを目標とする」[中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2016):227]としている。アメラジアンスクールの授業実践では、受講した生徒たちの①布を縫うという生活技術の習得は、衣生活における一つの基本的な技能を身につけることであり、また生徒たちが②物づくりを完成させることで物づくりの達成感が得られたことは、生活の中の課題を解決する力を身につけ、さらに生活を工夫し創造する力をもつことにつながっていくと考えられる。生徒たちが③家族を思いやる気持ちは、よりよい生活の実現を求めて家庭生活を工夫することにつながり、ひいては家庭生活への視点から広がり、④物を大切に生活環境に配慮する意識を育むことにつながると考えられる。つまりⅡ2.で導いた、布を用いた物の製作の、①布を縫うという生活技術の習得、②物づくりの達成感、③家族を思いやる気持ち、④物を大切に生活環境へ配慮する意識、を育むという意義を、アメラジアンスクールでの授業実践で実証することができたといえる。これを言い換えれば、本研究におけるアメラジアンスクール・イン・オキナワでの授業実践は、これからの社会における家庭科の教育目標に合致するものであり、有意義なものといえるのではないかと考える。

また本研究は、筆者らに、家庭科衣生活領域の技術教育研究としての意義について考える機会となっただけでなく、身近な地域で、沖縄県が抱える米軍基地問題に起因する子どもたちの生活課

題があることに、筆者らは直面することになった。最初は、ことばが通じるかどうか心配であったが、授業を進めるうちに、また授業の回数が多くなるにつれて、うちとけ、冗談を言い合ったりしながら、子どもたちのようすをゆっくり見守る余裕をもつことができた。同じ沖縄に暮らす子どもたちだと、公立学校や付属学校での教育実習で出会った子どもたちを思い出しながら、アメラジアンスクールでの授業を行った。これらの授業実践は、筆者らにとって、身近な地域と、日本、また国際的な状況についても考える機会となった。

謝辞

本研究にご協力いただきましたアメラジアンスクール・イン・オキナワの校長ウィリアム・トランプ先生、副校長、藤川美穂先生、並びに先生方、児童・生徒の皆様にお礼を申し上げます。さらにゼミでご教示いただきました琉球大学法文学部の野入直美先生にお礼を申し上げます。またアメラジアンスクールでの出前授業を共に行なった大城美咲さん、仲村希雄君に感謝を申し上げます。

なお、本稿は、琉球大学教育学部学校教育教員養成課程生活科学教育専修2016年度卒業生、崎山琴乃の卒業論文を基に修正加筆したものである。

引用文献

- 1) 大竹美登利他73名(2016)『技術・家庭 [家庭分野]』開隆堂。
- 2) 小林京子(2004)「被服製作実習の教育的意義」『中等教育研究紀要』、広島大学附属福山中・高等学校:163-168。
- 3) 櫻井純子編著(1992)『小学校家庭科指導細案小学校5年』明治図書。
- 4) 櫻井純子・内野紀子・鳴海多恵子他25名(2012)『わたしたちの家庭科小学校5・6』開隆堂。
- 5) 佐藤文子・金子佳代子他63名(2016)『新編・新しい技術・家庭、家庭分野：自立と共生を目指して』東京書籍。
- 6) 汐見稔幸他31名(2016)『新技術・家庭、家庭分野』教育図書。
- 7) 渋川祥子他11名(2004)『新編・新しい家庭5・6』東京書籍。
- 8) 多々納道子・竹吉昭人(2006)「家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義」『島根大学教育

学部紀要（教育科学）』第39巻：19-24。

- 9) 田中陽子（2011）「小学校裁縫科における裁縫と手芸の総合的扱い」『日本家庭科教育学会誌』第54巻第2号：108-116。
- 10) 特定非営利活動法人（NPO）アメラジアンスクール・イン・オキナワ（2013）『NPO アメラジアンスクール・イン・オキナワ2012年度年次報告書：文部科学省委託研究事業、平成24年度「生徒指導・進路指導総合推進事業」実績報告』。
- 11) 鳴海多恵子（2008）『基本が身につく、かんたんにできる、布を使った作品集』開隆堂。
- 12) 福岡市教育センター・家庭・技術・家庭科研究室（2009）『自ら製作する喜びを味わう家庭科学習指導法の研究—縫製に関わる知識・技能を活用させる学習過程の工夫を通して—』平成21年度研究紀要：1-22。
- 13) 松本由香（2013）「小学校家庭科衣領域題材についての一考察と提案」『住まい・環境教育学会論文報告集』第11号：53-61。
- 14) 與那嶺政江（2009）『アメラジアンスクール就学生徒のバイリンガル言語能力』琉球大学大学院教育学研究科修士論文。